

令和元年度 日本赤十字広島看護大学開学20年記念講演会

看護の道を志す皆さんに

日 時：令和元年10月16日

場 所：日本赤十字広島看護大学 講堂（ソフィアホール）

講演者：日本赤十字学園理事長 大塚義治

はじめに

今日は、小小学長のお心遣いで、こういうすばらしい機会を設けていただきましたので、楽しみにやってきました。

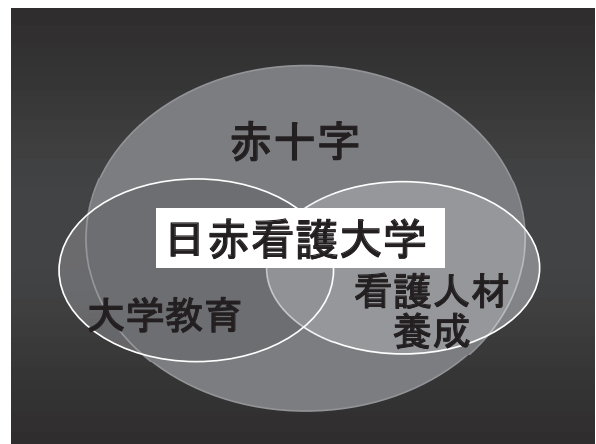
その前に、学長も触れられましたが、先週、主として東日本が、大変大きな台風19号によって被害を受けました。広島も、昨年は西日本豪雨で大変なことがあったわけですが、被災された皆様方に心からお見舞いを申し上げる次第です。台風19号については、日赤も、当然のことながら、直ちに救護活動を開始しております。現在も、何人ものスタッフが現地に向かっています。離れたところからではありませんけれども、心からエールを送って応援したいと思っております。

きょうは、本当に貴重な時間をいただきましたので、あれこれお話ししたいと思いますが、正直、国家試験に役立つような話はできませんから、気楽に聞いていただければと思います。私も、できるだけ堅い話にならないようにしたいと思いますが、なかなかそうもいかないかもしれません。いずれにしても、気楽に聞いていただければと思って、早速始めたいと思います。

日本赤十字社の歴史・活動・看護教育

皆さんは、私なんかには言わせると、こんなに恵まれた学校で学べるということはすごいことなのです。何といったって、世界文化遺産を毎日眼下に見て学ぶ、こんな学生はちょっといないのではないかと思います。大変恵まれた環境にあるわけですが、もう一つ、やはり覚えておいてほしいというか、忘れてほしくないのは、当たり前ですが、皆さんは、看護を学ぶためにこの大学に来ているということです。

本学は、当然のことながら、看護人材を育成するためにある。看護師になるコースは幾つかありますが、大学で学ぶというところに意味がある。そして、さらに、ここがきょうの話で大事なところで、赤十字というバックグラウンドがある中で学ぶ。看護、大学、赤十字、これが重なったところが日赤看護大学、全国に6つあるわけですが、その中の一つが本学ということになるわけです。



一昨年、日本赤十字社は、創設140年を迎えました。古い歴史があるわけですが、日赤の看護教育というのは、日赤の原点そのものなのです。

なぜか、そこに難しそうに書いてありますけれども、「本社（日本赤十字社）病院ノ設立ハ看護婦養成ヲ以テ第一ノ要件トナシタルモノナリ」、日赤病院は看護師を養成する、実は救護員を養成することをもって病院をつくるというような記録が残っております。日赤の歴史は、看護の歴史と言っていいと思います。

また、日赤は、大変古い歴史を持っておりますから、いろいろな方々が関わりを持っております。

こんな人も関わりがあります。綾瀬はるかさんが、

関わりがあるわけではありません。

もう随分前になるのですけれども、平成25年のNHKの大河ドラマ「八重の桜」、皆さんは、まだ幼くて観ておられないかもしれませんが、とても素敵なドラマでした。

この主人公は、同志社大学をつくった新島襄の奥さん、新島八重で、明治23年、1890年、日赤の社員、いわばサポーターとなって、篤志看護婦として、ボランティアの看護婦とっていただければいいでしょうか、日清・日露戦争などの傷病者の救護に活躍をした。

そのドラマの最後の2～3回に新島八重、綾瀬はるかさんが日赤の看護師の服を着て活躍をする場面が流れました。とても素敵でした。

本物の新島八重さんがこちらです。なかなか整った顔をしておられます。右の写真は新島八重さんを中心としたものになります。

ちょっと話がそれますがけれども、新島八重が詠んだ和歌、「心あらば立ちなかくしそ春霞 み墓の山の松のむらたち」というのを掲げておきました。新島八重は、愛する夫である新島襄を先に亡くしますが、こういう歌を詠んでおります。春霞は美しいけれども、もし心があるならば、春霞よ、向こうの松の林の中に新島襄のお墓がある、あのお墓を隠してくれるな、私が見えなくなってしまう、というような意味です。いかに新島襄を愛していたかということがわかる和歌ですけれども、ついでに紹介をさせていただきます。

日赤の看護の歴史は、そうそういつも平坦な道ばかりではなくて、大変苦難が多い歴史もございました。

その代表的なものは、太平洋戦争の頃です。多くの日赤の看護師さんたちが、いわゆる従軍看護師、軍隊と一緒に戦地に赴いて、傷病兵をケアする、そういう仕事についたわけでありまして。当然ながら、戦地のことですから、多くの看護師さんが命を落とされました。

今出ているスライドは、2015年、戦後70周年、TBSがちょうど60周年ということもあって、特別企画で2日連続のスペシャルドラマ、その名もズバリ「レッドクロス」というドラマが放送されました。松島菜々子さんが主演し、戦時中の日赤の従軍看護師さんたちの苦難を描いたもので、何か賞ももらっております。

日赤本社の前庭には、こういう銅像が建っております。殉職救護員慰霊碑、災害救護を含めて、作中に命を落とされた日赤の看護師さんを慰霊する



碑、銅像ですが、その大部分は従軍看護師さんです。さきの第2次世界大戦で亡くなられた人がほとんどです。この銅像の下にはお骨が埋まっているわけではありません、名簿が納められております。1300人ほどでありますけれども、ほとんどが戦時中に亡くなられた看護師であります。我々も、毎年8月15日、終戦記念日に、銘々がそれぞれの時間に献花をするということを行っております。こういう歴史があります。

次のスライドは、大分たって、スーダンの内戦の頃の話ですけれども、ケニア北部の戦傷外科病院、紛争地域で傷ついた兵士たちを助ける、赤十字病院で働く医師、看護師を主人公とした映画が4年前に公開されました。大沢たかおさん、石原さとみさんが主演で「風に立つライオン」。さだまさしさん原作の事実に基づいた話で、これも素敵な映画でした。

この中で、石原さとみさん演じる看護師さんが活躍するわけですがけれども、たまたま映画を観た後に、ある看護師さんと話をするがありました。彼女は若い頃、映画の舞台になったケニアの戦傷外科病院に派遣されて仕事をした方で、私は彼女に、「石原さとみさんが演じた看護師さんは、あなたがモデルですか」と言ったのです。以前、このAさんと話をしておりましたら、「その病院で苦労があったと思うけれども、何が一番辛かったですか」と尋ねたら、彼女が言うには、ある日、まだ歳が13、14、15あたりの少年兵が大変な傷を負って運ばれてきた。余りにも大きな傷で、その足を切断しないと命が助からないということで、その少年を説得しなければならぬ。その説得する役を彼女が言いつかった。辛いけれども、ここは命をなげらるために決断をして説得するわけですがけれども、当然のことながら、まだ子供ですから、いやだと言って、うんと言わない。必死に説得して何とか了解を得て、足を切断して命を助けることができた。あれほど辛い思いをし

たことはないという彼女の話を聞いたことがあったのです。まさにそういう場面がさっきの映画に出ますので、石原さんが演じていたナースは、あなたがモデルだったんだねと言っても、彼女は、笑って否定していました。

私にとって赤十字とは

私は、赤十字に関わってまだ十数年、長いといえは長いのですが、赤十字の人間にとっては半人前、駆け出しです。

しかし、私は赤十字に携わることができて、本場にラッキーだった、今の仕事ができ幸福だった、運がよかったと心から思っております。

そう思うのには、いろいろなきっかけがありますけれども、その一つが、私が赤十字に関わりを持つようになった2005年、平成17年のときです。ちょうどそのとき、愛知県で愛知万博「愛・地球博」という万博が開かれました。そのとき、赤十字もパビリオンを出しました。広い敷地にたくさんのパビリオンがあり、大きいのは政府が設置した日本館とか、トヨタとかソニーなどの名だたる企業が大きなパビリオンを持っていました。ところが、我が赤十字のパビリオンは、最も小さいパビリオンでした。場所も、端のほうで、最初のころは閑古鳥が鳴くような日が続いたようですが、それが不思議なことに、大ブレイクをすることになるのです。

万博の期間が半年、6カ月間に訪れた観客が47万人、6で割れば月当たり7～8万ですから、ざっと毎日3千人ぐらいの人が訪れたことになります。一番人気が高くて、小さなパビリオンですから、なかなか入れない。待っていただく時間が最長で360分、6時間でした。



最初に、ごく簡単な展示コーナーを見ていただくと、次のメインのコーナーがありまして、7分という短い映像が天井に流れて、それを見上げるような

趣向でした。最後にメッセージゾーンで、何か感じたこと、常日頃思っていることがあったら自由に書いてくださいと。この3つのゾーンで、さっと行けば、ものの10分もあれば終わってしまうパビリオンでしたが、これが大ブレイクをしまして、当時、万博事務局が、観客満足度調査、簡単に言うと、人気度調査をして毎日発表しておりました。その人気度ランキングで、日赤のパビリオンが1位を何日もとりました。これはびっくりすることでした。

メッセージゾーンでいただいたメッセージにも心に残るものがたくさんありましたが、例えば、お嬢さんが看護師なのか看護師になろうとしているのか、「娘が看護の道を歩むのを誇りに感じました」と、こんな素敵なおメッセージもいただきました。

いずれにしても、大ブレイクをした一つの要因が、そのとき流れた短い映像だと思います。それを持ってきましたので、せっかくですから、観ていただければと思います。

(DVD 視聴)

どうもありがとうございました。

いかがでしたでしょうか。

私は、この映像を何十回観ているかわかりませんが、観るたびに何かを感じさせられます。

東日本大震災での活動

もう一つ、赤十字って何だろうと考えてみる必要を感じさせられるものがあります。

それは、やはり、東日本大震災。現在もまだ、赤十字も義援金を募集していますし、被災地では救護活動が続けられています。

あの日、全国の赤十字病院から、「北へ向かえ」という合言葉で被災地に多くのスタッフが向かいました。

日赤の初動班は、発災後2時間で被災地に向けて出発しています。ちょうど私はその日、東京にはいたのですが、本社にはいなくて、本社から車で15分から20分の九段下で会議をしていました。あの揺れが来たので、本社に戻らなければいけないと思って、すぐに向かいましたが、その瞬間から大渋滞が始まってしまっていて、2時間かかってしまいました。やっとたどり着いたら、先遣隊、調査隊ですね、第1陣6名が被災地へ向けてたった今出発をしましたという報告がありました。

正直言いますと、私は、同じ身内、仲間ではありませんけれども、やはり、日赤というのは大したものだと思いました。2時間後に出発するということは、揺れがおさまったら、その瞬間から支度にかかっ

て、機材や車の手配をする、最小限の準備をして出発する、あつという間に出かけたということで、ある種の力を感じました。その日のうちに、全国から55の日赤の救護班が被災地に向かったわけですが、遠い地域からのチームは、その日に到着できたわけではありません。ちなみに、最初の先遣隊は4時ごろに東京の本社を出発して、石巻に着いたのは12時ちょっと前です。そんなことをしながら全国から次々に被災地に向かいました。

ひと月ぐらいたったときに読売新聞が、こんな記事を掲載しました。救護要員がどれだけ被災地に入ったかというものですが、日赤は当然の責務・役割だとはいえ、やはりダントツですね。正直、ちょっと誇らしく思って、今もこんな記事をとっているわけです。

| 震災発生から1か月間の 主な団体の医療支援者数 | |
|----------------------------|--------|
| 日本赤十字社 | 約2700人 |
| 全日本民医連 | 1840人 |
| 日本医師会 | 約1800人 |
| DMAT | 約1500人 |
| 徳洲会と関連団体 | 626人 |
| 日本看護協会 | 578人 |
| 日本歯科医師会等 | 518人 |
| 日本薬剤師会 | 515人 |
| 日本病院薬剤師会 | 515人 |
| 国立病院機構 | 423人 |
| 大学医学部 | 411人 |

※チーム数でまとめている団体は人数をかけて計算した。大学医学部は7日現在

H23.4.16 読売新聞

いろいろなエピソードが残りました。一つだけ紹介させていただきます。

宮城県石巻市は、最も被害の大きかった地域です。ほとんどの医療機関、病院がダメージを受けて活動不能になりました。唯一残ったのが石巻日赤病院で、大活躍をします。せざるを得なかった。その活躍は、日本国内はもとより、世界に知られるようになりました。当時の看護部長さん、後に副院長になられますけれども、金さん、当然、病院で陣頭指揮をとっておられました。私が震災後10日目ぐらいに石巻日赤に行ったときも現場で指揮をとっておられました。しかし、当時、私がお邪魔したときも、ご主人が行方不明で消息がわからなかった。みんな、家に帰ってあちこち探すなり連絡を取ったりしたらいい、少しでも家に帰りなさいと言うのですけれども、本人は、いやいや私は帰るわけにいかないと言って、仕事を続けました。結果的には、残念ながらご主人は亡くなります。

2年ほどたってナイチンゲール記章を受章されるのですけれども、その前に推薦手続があります。金

さんに、当時の活躍は十分ナイチンゲール記章に値するから推薦しますよと言っても、本人はなかなかうんと言わない、いやだと言うのです、推薦しないでくれと。なぜか。苦労したのは私だけではない、被害に遭ったのは私だけではない、私だけが名誉ある賞を受けるわけにはいかないと言って、何とでもうんと言ってくれないのです。私も、やむを得ず石巻まで出かけまして説得をした。要は、金さんの名誉でもあるけれども、金さん一人の名誉ではない。看護師さんの、石巻赤十字病院、あるいは日赤全体の名誉でもあるというようなことを言ったのではないかと思うのですが、金さんも、最後は喜んで受けてくださって、当時の皇后陛下から記章を授与されました。

ちなみに、今年度のナイチンゲール記章はお二人ですけれども、そのうちの一人は、日赤のご出身、九州国際看護大学の学長も務められました竹下喜久子さんが受けられております。大変喜ばしいことでもあります。

「赤十字の精神」と「看護のこころ」

私は、こうした経験を幾つか重ねると、皆さんが日赤の看護大学の学生だからというわけではありませんけれども、本当に赤十字の精神と看護のこころというのは、非常に近い、同じものと言ってもいいぐらい、そういう本質を持ったもののような気がしてなりません。

ところで、私は、外部の方にこういう赤十字の話をするとき、クイズを出すことにしております。どんなクイズか。

- ① 赤十字の創始者はナイチンゲールである。イエスカノーか。
- ② 赤い十字のマークは、国際的に認められたたった一つのマークである。イエスカノーか。
- ③ 災害救護、病院、血液の3事業は、各国赤十字共通の事業である。イエスカノーか。
- ④ 日赤の事業は、国・地方公共団体の支援によって賄われている。イエスカノーか。
- ⑤ 赤い羽根募金は、日赤の重要な資金活動である。イエスカノーか。

皆さんに聞いてもいいのですけれども、皆さんは赤十字の学生だから聞かないでおきます。答えは、全部ノーです。


一つ一つ解説する時間がないので端折りますけれども、赤十字の創設者はナイチンゲールかというのと、一般の方は、7割、8割はイエスと答えるのではないかと思います。ちょっと残念な気がしないでもな

いのですけれども、一つはナイチンゲールとデュナンは、ちょうど同じ時代に活動、活躍をした人です。先ほど言いましたように、看護のこころと赤十字の精神は非常に近い。ですから、私は、最近、イエスと答えても仕方がないと思っております。ちなみに赤十字の創設者は、ナイチンゲールでなく、アンリー・デュナン、ご承知のとおりです。

繰り返しになりますが、赤十字の精神と看護のこころは非常に近い。ちなみに日赤の創設者は、佐野常民、元佐賀藩士です。西南戦争の悲惨さを目の当たりにして、博愛社を設立します。傷ついた者は、敵といえどもこれを救うべきだと。そして10年後には日本赤十字社と改称して、その初代社長に就任することになります。

日本赤十字の創設者

- 佐野常民
- 佐賀藩士、大蔵卿・元老院議員
- 西南戦争時の悲惨さを目撃し、明治10年(1877)、博愛社を設立
 - ◆「敵ノ傷者ト雖モ救ヒ得ヘキ者ハ之ヲ収ムヘシ」
- 明治20年(1887)、日本赤十字社と改称。初代 社長に就任。



先ほど申しましたように、赤十字の原点は看護です。

その日赤の看護教育の歴史をおおざっぱに見ると、こんなことになります。

日赤の看護教育の歩み

- 明治23(1890) 救護員確保のため、看護師養成を開始 ～来年130周年
- 昭和29(1954) 学校法人・日本赤十字女子短期大学設立
- 昭和41(1966) 学校法人日本赤十字学園を設立 武蔵野赤十字看護短期大学開学
- 昭和61(1986) 日本赤十字看護大学(4年制)設立
- 平成12(2000) 日本赤十字広島看護大学設立
- 平成21(2009) 秋田の4大化により6大学に
- 平成23(2011) 6大学すべてに大学院(修士課程)配置
- 平成28(2016) 6大学すべてに大学院(博士課程)配置

明治23年に看護師養成を始めましたから、来年130周年ということになります。ご覧のような経過を経て、本学は平成12年、ちょうど2000年に設立されました。今日では全国6大学すべてに修士課程があり、5大学共同して博士課程を設置しております。

日赤は91の病院を今持っているわけですが、口はばつたいことを言うと私もちょっと力を注いだのですけれども、看護職の副院長が平成19年度から誕生しております。平成31年度、今年度は91のうち14の病院に看護職の副院長がおられ、延べでは44人の方が副院長になっております。それだけ、看護の役割が重要になってきていることの証左だと思います。

看護を取り巻く環境の変化

しかし、一方で、看護を取り巻く環境の変化は大変大きい、かつ速い。その急激な社会変化に柔軟に対応していく必要があります。最大の変化は、少子高齢化という人口構造の変化ですが、そういう記事や言葉は見たことがあるかもしれませんが、医療とか看護だけではありませんで、政治・経済・社会のあらゆる生活の隅々にまで、この少子高齢化は影響しております。

その中でも、特に少子化というのがあります。

丸印を付けましたのは、私は、いわゆるベビーブーマー1期生という意味なのです。私が生まれたのは、1947年ですけれども、その当時はベビーブームのピークで、1年に268万人の子供が生まれました。私も、その一人です。皆さんたちが概ね生まれた2000年を見ますと、119万ですから、私たちのときの半分以下です。昨年2018年は92万人ですから、ほぼ3分の1になっている。すごい変化です。

高齢化も進みます。これは、平成25年に「社会保障と税の一体改革」の議論をしていたときにつくられた資料ですけれども、高齢化が進む、したがって医療・介護の従事者がよりたくさん必要になる。看護職を見ますと、平成23年度の140万人の看護職が将来的には180万から205万人必要になり、いろいろなシナリオがありますが、40万から50万人不足するという数字が出されました。

医療・介護必要従事者数の増加

| | 平成23年度 (2011) | 平成37年度(2025) | |
|---------|------------------|--------------|---------|
| | | 現状投影 | 改革シナリオ |
| 医師 | 29万人 | 33~35万人 | 32~34万人 |
| 看護職員 | 141 | 172~181 | 195~205 |
| 介護職員 | 140 | 213~224 | 232~244 |
| 医療その他職員 | 85 | 102~107 | 120~126 |
| 介護その他職員 | 66 | 100~105 | 125~131 |
| 合計 | 462 | 620~651 | 704~739 |

「社会保障と税の一体改革」資料(H25.08)

最近、厚労省が新しい数字を公表しましたけれど

も、ほぼ同じで40万から50万人不足するという数字が示されまして、余り変わりません。

当然、看護系大学も急増しておりまして、ご覧のように、凄い勢いで、平成30年、去年ですが、263の大学、4年制の看護学部がある。週刊誌も取り上げているような状況ですが、仮に1学年定員100人の看護学部が10か所できたとしますと、10年で養成される看護師は1万人です。40万から50万人足りないというときに、幾らつくっても追いつかない。そもそも少子化が進みますから、学生数もそこまでいかない。

要は、医療のシステムを変えていかないと、これはどうにもならないというので、病床の機能分化を進めるとか、地域包括ケアシステムを進めるとか、こんな議論が行われているわけです。最近の医療看護に関する政策の変化は急です。

皆さんが今、学生として学んでいる立場において、こういう詳しい知識を必要とするわけではありません。しかし、こんな話がされているという雰囲気ぐらいは知っておいていただければいいです。きょうは詳しく説明する時間もないのですけれども、地域医療ビジョンとか地域包括ケアシステム、いろいろ言われているわけですが、近年の医療改革のキーワードは、一番下に書いてありますけれども、「機能（役割）分担」と「連携」という言葉で言えるのではないかと考えております。

それぞれ自分の役割をはっきりさせて、医療従事者として互いに協力し合うシステムをつくるという意味合いです。

そして、その意味するところは、私に言わせれば、それはとりもなおさず、看護の時代と言ってもいいと思っています。

どういうことかという、看護職は、まず何といっても、医療分野における最大の職能集団ですから、分担と連携をつなぐ中心にどうしてもならざるを得ない。あわせて、看護職の活動範囲がこれから広がっていく方向に動くだろう。例えば病院・施設から地域へと書いてありますが、在宅医療の担い手の中心は、恐らく看護職となるであろう。これを否定する人は余り聞いたことがありません。具体論は、人それぞれですが、皆さん、そうおっしゃいます。

そして、それゆえ、看護職の担当する業務範囲も広がっていきます。より独立性、専門性を持ったものになっていきます。特定看護師という制度ができて、今動き始めておりますし、日赤も取り組んでおりますけれども、一つの例であります。

ということは、今言ったように、これらの課題に

対応していく中心は看護だ、となれば必然的に教育の内容も変わっていかざるを得ないはずですよ。

すなわち、看護職一人一人に専門職・プロとしての能力、豊かな教養がより一層、求められてくる。いわば独立して責任を持って行う仕事という形に近づいていくと思いますし、その内容も多様化して高度化していく、こんなことが言えると思います。脅かすわけではないけれども、皆さんは、大学時代も含めて、これから先も含めて、しっかり勉強しなければならない、大変だなというふうに思います。

ただし、厳しい道だけれども、必ず乗り越えられるに違いないと思っております。それは、助け合う、あるいは励まし合う仲間が、ここにもおられるわけでありまして、先輩たちもおられます。先生方もおられます。多くの方に支えられて、必ず乗り越えられると思っております。

おわりに～これからの大学教育～

そして、大学での話ですから、先生方にも、ちょっとお願いをしておかなければならないと思います。

たまたま、これも随分前、平成26年ですから5年前になりますけれども、元慶応義塾大学の塾長、今は全国社会福祉協議会の会長であられ、私が尊敬する学者の清家篤先生が中央公論にこんな文章を書いておられました。ちょっと読んでみますと、「変化に対応し、将来を見据えた教育研究を実現するために、大学改革は不可欠です。改革を進める上では、変えるべきことと変えてはならないことをしっかり分けて考えなければなりません。変えるべきこととしては、大学の中でも多様性を高めること、変えてはならないことの筆頭は、私立大学の場合にはなんといっても建学の理念です。」

私どもの大学は赤十字の理念ですけれども、「もしその理念の実現を妨げるものがあれば、それこそ真っ先に改革のターゲットとすべきでしょう。」

「大学改革は、最大のステークホルダーである学生のために進められなければならないことは言うまでもありません。では、何が学生のためなのか、顧客満足という表現を聞いて少し違和感を感じたことを覚えています。学生が顧客ならば授業料に見合った分かりやすい授業や親切な就職指導などを提供すればそれで十分かもしれません。しかし学生は私たちにとっては大切な人生の後輩だと思います。最も重要な評価基準は、その人が人生を終える時に『あの大学で学んで本当によかった』と思えるかどうかでしょう。大学人はそこまで責任を持って後輩たちが人生の財産、例えばどんな状況においても冷静に

事態を打開できる『知』を身につけられるような教育を行わなければならないと思います。』

なかなか厳しい御指摘ですけれども、我々はこういう心意気を持って教育、授業に携わっていきたいと思っております。

時間が来ました。まだまだお話ししたいことはた

くさんございますし、一方では十分なお話はできませんでしたけれども、これからの皆さんの学生生活が有意義に、そして何より楽しいものであることをお祈りして、私の話を締めさせていただきたいと思っております。

ありがとうございました。

